
シュレーディンガーバタフライ（仮）予告編

麻婆豆腐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シュレーディングーバタフライ（仮） 予告編

【Nコード】

N1301Y

【作者名】

麻婆豆腐

【あらすじ】

巡る巡る輪廻の輪。どこにでも存在する、犯してはならない禁忌。ひらりひらり舞う蝶を追いかけ、森羅万象を冒涇する新しい技術を開発した代償として、「一人の男」の存在が書き換えられる。

SF＋ファンタジーな物語、の予告編です。

本編を投稿完了しだい、削除させていただきます。

もっとも、本編は、また数ヶ月後ぐらいになるかもしれませんが、

お許しください。

二つの交差のプロローグ 上（前書き）

この作品は、予告編です。

本編はまだまだ書いてません。

乞うご期待！すみません調子に乗りました。

二つの交差のプロローグ 上

ブルルルルル……

机の上に置いた携帯が、僕へのメールを知らせる。マナーモードにしても、バイブ機能のおかげで宿題と格闘中の僕でも、気付かなかった、なんていう事態にはならない。

ペンを握る手を止めて、携帯に手を伸ばした時に、振動によって少し動いた携帯が、机の上から落ちたとしても、バイブ機能と言うのは本当にありがたいものだと思う。

まあ、後で家の中なんだから、マナー解除しておけばいいんじゃないか、と気づいたけれども。

僕の名前は佐伯彼方。読み方は、「さえきかなた」だ。何処に行ってもそれは変わらないし、男である僕はたとえ結婚しようと、普通は名字が変わることは無い。

年は十六歳。趣味は読書。背は低い方だから、年齢通りにはあまり見てもらえないけれど。

どうにか手を伸ばし、椅子から降りることなく携帯を手にとった僕は、そこに表示されている「新着メール 二件」というメッセージが、期待と不安でなかなかボタンを押せなかった。

十分ほど前、最近少し仲良くなった、現在片思い中の同級生、千葉さつきに送ったメールには、「明日、どこかに遊びに行かない?」といった、ありきたりな内容の誘い文句が書かれていた。

ベタで何の捻りもない、たった二十文字程度の文面とはいえ、これを書き上げて送信するのに、僕が二、三時間かかったというのは余談。もちろん、文章を書き上げるのに一分、送信ボタンを押すの

に残りの時間全部だ。

そして、この新着メールには、おそらくその返信が含まれている。

とりあえず、受信ボックスのメインフォルダを開けると、そこには見知らぬアドレスと、僕の記憶にもしっかりと焼き付けられている、彼女のアドレスがあった。件名は「Re; もし暇だったら」。

どうせスパムだろうから、もうひとつの方は後で削除するとして、問題のメールを恐る恐る開く。

ゴクツ、と唾を呑む音が、やけに大きく響いた。

そうそう、「シュレーディンガーの猫」という実験を知っているだろうか？箱の中に入れられた猫が生きているのか死んでいるのか、二つの可能性がある場合、その二つの結果のうち、どちらになるのかは、誰かに観測されて初めて決定する、という理論―――。

『送信者…千葉さつき

受信者…僕

件名…Re; もし暇だったら

本文…うん、いいね。何処に行く？カラオケとかかな、やっぱり。他に誰か呼ぶ？』

「よっしやああああっ！」

思わず右手がガッツポーズをとる。

どちらかといえば、断られる可能性の方が高いだろうな、と思ってただけに、喜びも大きい。

当然のことだけど、二人で行くべきか、誰か呼ぶべきか。それが問題だ。

生きるか死ぬか、とまでは言わないけれど、かなり重要な問題には違いない。個人的には二人で行きたいけれど、さつきさんがどう

思ってるのかにもよる。

もし大勢で遊びに行くことを想像しているなら、誰か事情を知っていて、なおかつ空気の読める奴を呼ばなければならない。後でかわれるのは覚悟の上だ。

とりあえず宿題は脇に放り投げて、返信メールを作成する。

『送信者…僕

受信者…千葉さつき

件名…Re, Re;もし暇だったら

本文…OK。何処に行きたい？カラオケでもいいし、他にはボウリングとか？映画は

あまり面白そうなのがやってないし。

誰か呼びたい人とかいる？僕は特に居ないけど。運動部の人は高体連が近いから部活で忙しい
みたいだしね（＜|
＞）』

……彼女任せの最低な男

そんな称号が、脳内を独り歩きし始めたけど、気にしない。

そもそもまだ彼女じゃないし！と思考から弾き出して、あ、気にしてるじゃん。なんて。

そんな感じで、夜も更けていき、さつきさんと二人でカラオケに行くことが決定した時、ちょうどデジタル時計の日付けが進み、「明日の事」から「今日の事」へと変更された。

集合まで後九時間。そして僕が眠れたのは、秋の夜空が白み始めるころだった。

「ふぁあゝ。あー、ホント眠い……」

ベッドからのっそり起き上がり、大きく伸びをする。

寝る前にセットしておいた目覚まし時計のやかましい音を止めた。そう、ちゃんと早めに午前七時にセットしておいたのに、そこには8…15と表示されていた。

どうやら、だいぶ前からずっと鳴っていたらしい。ノンレム睡眠とレム睡眠が入れ替わったから、ちょうど目が覚めたのだろうか。今はもう思い出せないけど、夢がキリがいいところで終わったから、多分その仮説が正しい気がする。

「つてのんびりこんな考察してるほど余裕ないし！」

僕は現在、水深二〇〇メートルの大陸棚ぐらい深い訳があって、独り暮らしをしている。

だから朝ご飯が置いてあることもなければ、「どこに出かけるのー?」尋ねる母親の声もない。もちろん「彼女とデートでもするのか?」等とニヤニヤしながら、わざわざ新聞を置いて訊いてくる父親もいない。

僕は、毎朝朝ご飯を食べることを信条にしているのだけど、今日だけはそれを捻じ曲げさせてもらおう。

お気に入りの黒いパーカーに腕を通し、買ったばかりのジーンズのベルトを締める。

それだけの作業ももどかしく、戸締りの確認すらせず、昨日のうちに用意しておいた鞆を掴んで僕はアパートの自室を飛び出した。

駐輪場に置いてある、自分のマウンテンバイクの鍵を差し込み、一気にペダルを踏み込む。

集場所までは、自転車でぎりぎり間に合うかどうか、というところ。なんとしても遅れる訳にはいかない。

「あーもう！ 何でこんな時に限って赤信号に引っ掛かるのかなあっ！」

下り坂で一気に加速したのにもかかわらず、そのすぐ先で急ブレーキを駆ける羽目になり、舌打ちと愚痴を隠せなかった。

青に切り替わるなり、よろめきつつも早いスタートダッシュを決め、必死に走る、走る。途中で買い物帰りのおばさんにぶつかりそうになって、「すみませーん」と謝罪を空に残しつつ、僕は駆けた。

集場所は、結構広くて、綺麗なことから人気のある市民公園。その噴水に辿り着いた時には、既に息が切れかかっていた。腕時計の示す時間は、八時五十五分。どうやら間にあったみたいだ。

ぜいぜいという荒い呼吸のまま、ふと顔を上げると、反対側から歩いてくるさつきさんの姿が輝いて見えた。多分、僕の眼がおかしいわけではないだろう。

短くて茶色がかった髪に、やや垂れ眼気味なさつきさんは、容姿も僕は凄く可愛いと思う。色眼鏡？ そうかもしれないけれど、そんなことは気にしない。

普段、制服姿しか見ていないけれど、私服姿の彼女も凄くいい。

ファッションのことには詳しくないけれど、白いパーカーにスカイブルーで、デザインの綺麗なシャツ、それよりも色の濃い蒼いスカート。

手に持っている鞆もクリーム色だし、帽子は雪のように真っ白。

純白、とでもいうのだろうか。首に提げているのは、修学旅行の土産に買ったのだろう、シルバーアクセサリー。太陽の光を反射して、きらきらとか煌めいている。

文句なしに一〇〇点満点。写メにして残しておきたいところだけれど、本人の許可も無しにそんなことをするわけにはいかないし、それを頼む度胸が僕にあるとは、到底思えない。

地味なフードつきの黒パーカーに黄色とオレンジ、白と青の長袖。ジーンズもダメージが入った黒から灰色へのグラデーションのような色合いになっている僕。

アクセサリーの類は一切無し。彼女と同じくシルバーアクセサリーをつけていこうかと悩んだ結果、なんとなく置いてきたのだけど、おそらくそれは正解だっただろう。

腕時計は、全体が銀色で、文字盤が紺色の鈍い光を放っている。鞆は少し濁った感じの緑色とうすい灰色のショルダーバック。

服装なんて、つい最近まで「動きやすくて派手じゃなければ何でもいい」としか考えてなかった僕は、昔と比べればマシになっているのだろうけど、自信なんて雀の涙ほどもない。

「よっ！ 待たせたかな……ってそうでもなさそうだね、その様子じゃ。そんなに急がなくても良いのに」

「おはよ、さつきさん。時間ぴったり。僕と言えば寝坊して、全速力で自転車を駆る羽目になったんだけど。さすがに言いだした本人が遅れる訳にはいかないだろ？」

僕の姿を見るなり笑いだした彼女に、僕は苦笑を浮かべるしかない。

とはいえ……さあ、楽しい時間の始まりだ。

とりあえず、カラオケに行く前にぶらぶらとショッピングモールに行ったり、僕の財布から黄熱病の治療に貢献した方が数枚消えていたり、「スマイルください」なんて変わった注文もできるハンバーガーの一大チェーン店で昼食を摂ったりした後、午後二時ぐらいいなくなってようやく手近なカラオケボックスに入った。

移動のときは、主に僕が前かごに鞆を入れて自転車を押しながら歩き、人の少ないところでは二人乗りしたりもした。

途中知り合いに会ったらどうしようかと、これまたベタな心配も今のところ杞憂に終わり、ドリンクバーのコーラを片手に、カラオケルームに入った時には、ホッと思わず肩の力が抜けた。

「さて、と。私が先に歌わせてもらっても？」

言うなり、彼女は返事も待たずにピピピ、とりモコンを操作し、一覧すら見ず曲を登録した。

鞆をソファに放り投げながら、手慣れた様子で。

「いきなり十八番？ やるねえ」

「まあね。この歌、私の大好きな曲だからさ」

彼女が選んだ曲は、最近人気の出始めた三人組のユニットによる、「何時か何処かの物語」。

確か、真野っていうまだ若い大学生ぐらいの人だったかな、歌ってるのは。

ユニットのボーカル兼現役大学生兼小説家、だなんて多才も良いところだ。

真野って人は男性にしては声が高いけど、僕と同じくらいだから、さつきさんには難しいと思うんだけど……。

『あの日も見上げた夏の夜空　一つ落ちてった流れ星　叶え、願い事』

期待を込めてマイクを握る彼女を見つめると曲が始まるのが同時だった。

「上手い……」

聞こえてくるのは、やや低めなアルトの声。

原曲よりもずっと良い、少なくとも僕はそう感じた。

それからの凡そ六分間、ずっと彼女の歌に聞き惚れていた……訳じゃない。

途中で女声でハモリが入る箇所があるから、そこは裏声で僕が担当した。驚いたように彼女はさっとこっちを向いたりしたけど、にっこりと笑って、「OK」のサインを送ってきた。

ここで気の利いたリアクションが出来ないのが、いつもの僕だ。なのに空気に当てられたのか、左目でウインクを返すなんていう、後で恥ずかしさに悶絶すること間違いなしなことをしてしまった。

まあいいや、とすぐに考え直し、ラスト、サビの部分に入った彼女の姿に意識を戻す。

もう僕の出番はない。コーラを少し口に含んで、僕はソファに体重を預けた。

『時は流れて、記憶は消えてく。でも夜空を見上げれば、いつも浮

かぶ誰かの笑顔。それは何時か何処かの、僕の物語』 歌い終わって彼女の笑顔が眩しくて、思わず目を逸らす。

まるでこの歌に出てくる主人公みたいだな、なんて考えたりするところ、僕はちよっとおかしくなっているんだろう。

でも多分、カラオケに来る度、この曲を聴く度に今のこの瞬間を思い出すんだろうな。

「うん、今日はとっても綺麗に歌えた。得点は……」

タイミングよく画面に表示された得点は九十八点。
ランキングは全体で二位。

「あ……なんか惜しいな」

「でも私の自己ベストは更新できたし良かった。また最後にもう一度チャレンジしてみようよ」

「賛成。じゃ、次は僕の番だな」

僕は今までで最高に楽しい時間を目一杯享受するため、メーターが振りきれ程にテンションを上げた。

それから四時間が経った。一度延長して最後にもう一度歌った『何時か何処かの物語』は、九十九点のランキング二位。

一位は、何処かの誰かが百点をとったらしく、僕らが二位になる少し前に、記録更新されていた。

「あー、楽しかった。あの曲、誰が一位とったんだろうね？」

カラオケボックスから出る際、どこか寂しそうな満面の笑みを浮かべた彼女は、凝り固まった肩をほぐしながら呟いた。

「そうだな。もしかして本人だったりして」

大学だって今日は休みの筈。有り得ない話じゃない。

「でもいいや。また今度もう一回やってみよ？」

何気ないその一言。

一瞬、聞き間違いかと思ったけどそうじゃない。

次の瞬間には、顔が一気に紅く染まりそうになって、必死に自制する。

「あ、ああ。次は一位とらないとな。で、どうする？時間的にはそろそろ晩御飯だけど」

慌てて話題転換。僕ってダメな奴だな、と改めて確認させられる。

「私はお母さんに早く帰るって言ってあるから。ごめんね、今日はもうここでお開きに……」

「ああうん。じゃ、また次の月曜日に」

じゃあね、と手を振って遠ざかっていく彼女。

いつの間にか、僕は手を伸ばして、彼女を呼び止めていた。

どうしたんだろう、と自分で疑問に思う前に、勝手に口が開いた。

「あ、ちょっと待って」

「どうしたの？告白でもしてくれるのかな？」

たぶんそうかも、なんていう考えが脳裏に浮かぶ。

でも、僕の口は止まらない。

「あー、うん。今のうちに君に言っておきたいんだけど……」

そこまで言った瞬間、僕は唐突に意識を失った。

二つの交差のプロローグ 上（後書き）

いかにも平凡な、しかし思い切り未練の残りそうな感じになりました。

どこが「恋愛要素薄め」だバーカ！とか思われる方、本当にすみません。本編では、これから稀にこういう回があるかもしれませんがお許しください。

二つの交差とプロローグ 下（前書き）

今回は異様に短いです。

しかも説明も無し。

これは主人公が「当たり前」と思っているからです。

ではどうぞ！

二つの交差とプロローグ 下

「よし、出来た！」

やったね！ と僕は椅子に座ったまま、思い切り万歳をした。

机に向かって、必死に研究を纏めていたんだから、椅子に座っているのは当然の事。

なら、万歳の反動で椅子ごと後ろに倒れてしまうのも、当然の事なのだろうか。

あ、ミスった。と思う間もなく、木製の床で頭を強打した。

本棚までが傾いて、中の参考書や研究資料をぶちまけながら、盛大な音をたててくれた。

脳のニューロンだっけ？ まあとにかくそんな感じの名前の細胞だか神経だが、一氣にどれだけ死滅したんだろう、とかそんな無意味な考えが浮かぶ。

もっとも、僕が研究してたのは「失われた記憶」を元に戻す魔法。

自分自身で今どんな記憶を司るものが無くなったのか、試してみるのも有りかもしれない。

「僕の名前は佐伯彼方。年齢は、聖霊歴で16歳。だから勿論、後四年ぐらいで成人式。

訳有って、両親とは別居中だからこのそう広くもない、煉瓦と木で出来た家でも、あれだけの音に誰も反応しない。結構ボロいから、耐震の魔法を掛け直したほうがよさそうだ」

うん、個人情報の問題ないみたいだ。

というか、何を忘れたのかなんて、分かる筈がないじゃないか。

そうとわかれば、被験者も居ないことだし、自分で実験するしかない。

先程仕上げた魔法陣に、「対象…自分」の意味を追加する。

「精神干渉系固有魔法、メモリーズバック記憶返還」

指先を魔法陣に向けて、そう呟いたか否かの内に、僕の意識は眠りに落ちるかのように、一瞬にして消えた。

二つの交差とプロローグ 下（後書き）

予告編、終了です。

張り損ねた伏線もあると思いますので、余程の事がない限り、これをそのまま本編のプロローグにするつもりですが、改変されているかもしれません。

※実際には頭を打っただけで記憶が欠損することは、かなりの衝撃を与えない限りない（この『かなり』って狡い単語ですね）、と言われていますが、今回の「佐伯」の世界には、「電気信号」という概念は、設定上まだないので、科学や所謂「現実世界」の医学は、未発達のままなのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1301y/>

シュレーディンガーバタフライ（仮）予告編

2011年11月16日02時40分発行